



BOOK☆WALKER限定購入特典

蝸牛くも 書き下ろしショートストーリー
『馬子にも衣装というけれど美しい
馬子の場合はどうなのかというお話』

『ゴブリンスレイヤー16』

書き下ろしショートストーリー

蝸牛くも



3 『ゴブリンスレイヤー16』書き下ろしショートストーリー

本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、SBクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。

本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

馬子まごにも衣装いしやうというけれど美しい馬子の場合はどうなのかというお話



馬子にも衣装というけれど美しい馬子の場合はどうなのかというお話

「という言葉は差別的ではなく、むしろ称賛なんじゃないかと僕は思うね」
「貴女が言うのだいたい間違っではないんですけれどね？」

女商人は溜息混まじりに、目前に立つ巨軀——磨き抜かれた宝石の如き肢体を見やった。極限まで鍛え抜かれ、引き絞られ、洗練された筋骨の生み出す優美な稜線。束ねに束ねた血統を、宝石の如く研磨して作り上げた、ある種の芸術品にほかならない。それはまったく見事なもので、彼女を彩るような衣装を纏わせるならば、それは——……。

「……まさに、馬子にも衣装は褒め言葉なのかもしれませんね」
「ふふん」

どうだ、と。稲妻の瞳を煌めかせ、得意げな様子でお抱えの走者は胸を反らした。まるで子供のような仕草で、これが王都の競技場を沸かせた本人とは、とてもとても。——本当、気分屋ですからね。

お抱えの選手のその有様に、けれど女商人はむしろ微笑ましささえ覚えている。それはある種の、勝手な共感というものだったのかもしれない。

馬人の走者として圧倒的な体躯と、それに伴う膂力。

天賦の才に恵まれていながら、その代償として、彼女の蹄はその重量と膂力に耐えられない。真つ白しろい靴と女の子からの応援があれば、絶対に勝って見せる——と、当人は嘯くけれど。割れた蹄から血を流してでも齒を食いしばって走る姿を見て以来、女商人は彼女のファンだ。そう、走者たちのファンになる観客たちの気持ちだが、初めてわかった。

手酷い失敗をした愚かな娘が、どうにか踏ん張って立ち上がる時の、支えの一つだ。——などというと、調子に乗るから言いませんけれど。

「さて、せっかく王都に来て勝負服を仕立てたのですし、ついで見物もしましょうか」

「お、良いね。逢引のお誘いかな？ それならば喜んで、エスコートの一つでも」

「そうですね」と女商人は微笑んで、さらりと言った。「白い靴でも見繕ってあげましょう」
反撃は、なかった。

おや？ と思つて目を向ければ、そこには女商人が初めて見る、彼女の表情。

「………そういう事をサラツと言うのは、卑怯じゃあないのかな」

「さて、どうでしょう。不意打ちは基本らしいですし？」

何の基本だよという恨み節を冒険ですと受け流し、女商人は微笑んだ。

「では、エスコートしてくださいね？ ——それとも、される方が好みですか？」

「……まったく」と走者の瞳の奥で、稲妻が煌めいた。「後悔しても遅いからな」

馬人は臆病^{おくびょう}な種族だが、走者となる者は闘争心をひたすら高めてきた血統^{まつえい}の末裔だ。その意味を女商人は、その後で嫌というほど思い知るのであった。

7 『ゴブリンスレイヤー16』書き下ろしショートストーリー

【購入特典】

『ゴブリンスレイヤー16』

購入特典 蝸牛くも 書き下ろしショートストーリー

2022年7月14日 発行

著者	蝸牛くも
イラスト	神奈月昇
制作	株式会社ブックウォーカー 〒102-0071 東京都千代田区五番町3-1 五番町グランドビル3F
プロデュース	SBクリエイティブ株式会社 GA文庫編集部

© Kumo Kagyu / SB Creative Corp.

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

GA文庫	https://ga.sbcr.jp/
BOOK☆WALKER	https://bookwalker.jp/